

# 武家名目抄稿

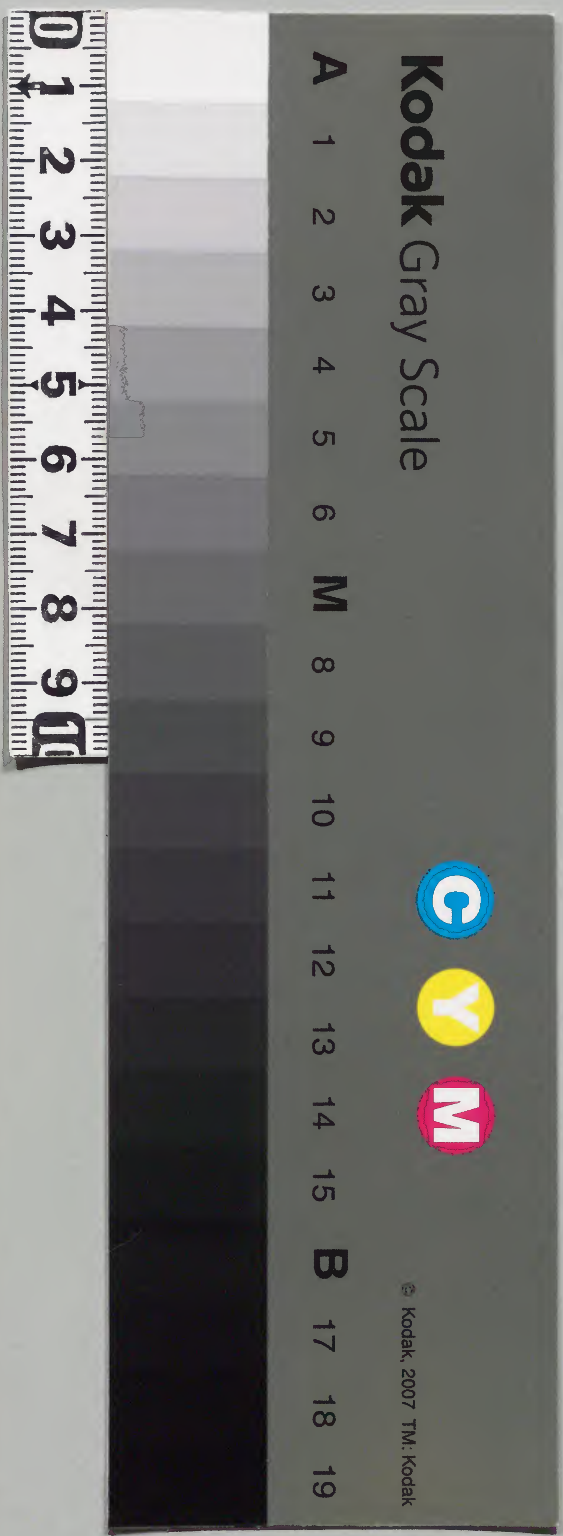
稱呼部

十二

和	二	和	二
書	五	書	五
門	二	門	二
類	〇	類	〇
	六		六
	七		七
	七		七
	函		函
	架		架
	冊		冊
	四		四
	五		五
	天		天

庫	文	閣	内
和	〇	和	〇
書	二	書	二
類	〇	類	〇
	六		六
	七		七
	函		函
	架		架
	冊		冊
	四		四
	五		五
	天		天

内閣文庫	
番號	和 25206
冊數	457 (107)
函號	153 275







武家名目抄稿第十二冊

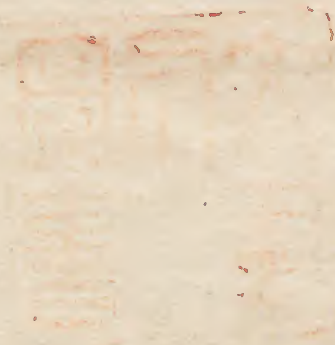
稱呼部八上目錄

大名

外様大名

國大名

法師大名







武家名目抄稿第十二冊  
平家物語八上  
大名

武家名目抄稿第十二冊

平家物語八上

大名

平家物語云八上河 ちーやうくん小松うん  
れまけ少物これよりれつ又るんとうれあん  
ふいーやとてふる井のさいとうへ川たうさ  
りりをめーとやーささもりあんち秘のつよ  
ゆーせいひやう八うこにいう秘あるそとせひ



わいささとう一川さうあささひてさふい  
君をささひさうでさ夫とねるしめされい  
りろり日つりすさそくさつあまつりい  
えんとうにさ夫とちやうれものすみそく  
ふをとりくひくいゆその河よさも志  
たうある名のふ六人してさういさうれせい  
ひやうともういはいさうひの二三さうり  
さやましくうけていとせいいさ。やうとちや

うれものいさふをささふい

長門本平家物語云本考全世のいさ

こ元伐ねそれく高國の太名根井小石滋

聖章親と云名のふさふうで授章親出れ

せ徳五てもくあーいしきある

判官物語云義経秀衡の館屋をひく伐よ

わく甲なるいさやう國の太名三百さ十人

をささして日こにさうらんをまいた



君汝志由らまいらせよ

吾妻鏡云元暦元年三月一日御下文云下  
土佐國大名國信國元助光入道等所可早  
源家有志輩同心合力追討平家支右當國  
大名并御方有志之武士且企叅且同心與  
力可追討平家之旨被宣下之上依鎌倉殿  
仰所令下知也就中當殿上洛御家人信恒  
可令下向如旧令安堵不可有狼藉大名武

武士同心合力不可見放之狀如件宜兼知  
敢勿違失以下壽永三年三月一日平  
又云文治四年三月十七日癸丑東大寺材  
木周防國出杣之處十木引失訖仍被宛諸  
國者還可為懈緩之間被宛諸大名者存結  
緣可沙汰進歟之由雖有院宣御家人趣善  
緣之類少者歟有難設思者大功難成歟之  
由今日被進二品請文



又云建久四年六月五日庚子八田左衛門  
尉知家與多氣太郎義幹者常陸國大名也  
強雖不採宿意於國中相互聊爭權勢者也  
云々十二日丁未八田左衛門尉知家訴申  
義幹有野心之由廿二日丁巳為善信俊兼  
等奉行被召決知家々々義伏無所適及被  
收公常陸國筑波郡南郡北郡等領所被召  
預其身於是邊權守泰綱云々於所領等者

則今日賜馬場小次郎資幹云々七月三日  
丁卯鹿嶋造管行事被仰付馬場小次郎  
資幹令拜領多氣義幹所領已為當國內  
大名云々  
又云正治二年二月六日壬戌重忠云緋起  
楚忽不可有鑿榘引橋之計難治欵云々安  
藤右馬大夫右宗聞之云畠山殿者只大名  
許也引橋構城郭事不被存知欵壞懸近



隣小屋於橋上故火燒落不可有子細云

又云弘長元年五月十三日甲戌今日晝春

之間於廣柳所佐々木壹岐前司泰綱與淡

谷太郎左衛門尉武重及口論是泰綱以武

重有稱為大名之由事武重咎之云已且嘲

哂之詞也於當時全非大名先祖重國號法谷庄

同者誠相模國大名内也然問貴辺先祖佐

々木判官定綱于時號太郎牢籠之當初者到重

國之門寄得其扶持子孫今為大名歟云々

泰綱云東國大少名并淡谷庄司重國等皆

官平氏莫不蒙彼恩顧當家獨不諛其權勢

奇譜代相傳佐々木庄偏運志於源家遷任

相模國尋知音之好得重國以下之助成繼

身命奉達于右大將軍草創御代抽度々之

勲功兄弟五人之間令補十七箇守護職刺



面ニ所令任受領檢非違使也昔宇籠更非  
耻辱還可謂面目之云々

義久軍物語云去程小沛一町んとせしめし  
それ名なきふ家さふくひなら城二位との  
つり免してこんとのあち一のいんせと  
阿着依ら申ていそくいうさぬふもふ  
のふせく色友軍せ免るる洞さんふの  
と申せし二位殿え志ふとと申すやう

一強いう小侍ともたうふさけめつ  
さふらひひむう一三とせのち  
城志ゆこそるる一このち軍と思ひ  
うとう申せしれらふふとち  
三とせのさいを申うにちううつ  
家財をうちほさうてうりて  
殿これをあまれすせぬひ三と  
めふんふあさうひ人のと  
とせをさふやうに志と







又云さて又くひんとうの志やうらんふいとく光

三やう明のせ川峯寺やうみちいへ道の二かん

こと一ニさいふあをそけとめ申され

不中兼久元年六月廿六日郡せとせぬひて七月

十九日とむまのこくよいうゆくちう記

せとひふはよつうせぬひりふたちまちになつ

と己人の志せいて、武士の志やうふ徳り強

ふ事めつうううなる志やうのみちまのうのよ

ひひ花枝ううりしやうさぬをらひふ徳らん

お色うまううふやうけふ人島津の志やう

ん伊藤いとうさぬめんをさひうの六郎とほめ

とてあまの志やうをくせまて己ら君

の西むうふふしうり時のさく後れぬるえゆ

かり事新ありさぬたう祭

百練抄云昏仁元年二月十七日癸巳関東

將軍上洛而太閤攝政相國於棧敷被見物



天下貴賤群集人不得顧車不得廻修理大  
夫時房朝臣已下可然之大名一人不漏參  
洛云々

言上上エツ  
柘栲論云於軍家以旧跡小停取をつつと色  
かハ昨世以下以諸石名屋形のをあつて  
石とに強倉れ膝を被し目年くく其を是り

下  
畧

太平記云 五大院右二門采  
繁藤相模太郎條 義貞已ニ鎌倉

ヲ定テ其威遠近ニ振ヒシカハ東八箇國  
ノ大名高家手ヲ束子膝ヲ不屈ト云者ナ  
シ云々

又云 依山門吹訴  
公卿會議條 同八月ニ上皇臨幸成テ

供養ヲ可被遠トテ國々ノ大名共ヲ被召

代々ノ任例其役ヲ被仰合云々

又云 十三三ノ  
龍馬進 諸國ノ御家人ノ稱號ハ頼朝

卿ノ時ヨリ有テ已ニ年久シキ武名ナル



ヲ此御代ニ始テ其号ヲ被止ヌレハ大名

高家イッシカ凡民ノ類ニ同シ

又云天正本尊山名参河守ヲ始トシテ宗

徒ノ大名五頭ヲ指向テ攻ラレシニ一日

一夜戦テ成願坊討死シケレハ城ハ則落

ニケリ

又云主上御没十月同日而檢断高橋刑部左

衛門糟谷三郎宗秋六波羅ニ参テ今度被

生虜給シ人々ヲ一人ツヒ大名ニ被預中

萬里小路中納言藤房六條少将忠頭二人

ヲハ主上ニ近侍シ奉ルヘシトテ故召人

ノ如ニテ六波羅ニリ留ノ置レケル

又云相模入道其比洛中ニ田樂ヲ弄事昌

ニソ貴賤舉テ是ニ著セリ相模入道此事

ヲ聞及ヒ新座本座ノ田樂ヲ呼下ノ日夜

朝暮ニ弄事無他事入興ノ餘ニ宗トノ大



名。達ニ田樂法師ヲ一人ツク預テ裝束ヲ  
飾<sup>レ</sup>セケル間是ハ誰カシ殿ノ田樂彼ハ何  
カシ殿ノ田樂ナント云テ金録珠玉ヲ逞  
シ綾羅錦繡ヲ妝レリ宴ニ臨テ一曲ヲ奏ス  
レハ相摸入道ヲ始トメ一候大名我芳ヲ  
シト直垂大口ヲ解テ抛出ス是ヲ集テ積  
ニ宛山ノ如シ  
難古平紀云多とひ少と所政及たこの事

ありとも関東大名等一同せり日本國以守  
護たる也一云  
庭訓往来云拓関東ト向之大名言其人ト以  
初次之便ヲ打寄之由内ト其少能  
勢州軍記云南伊勢國司北畠多藝御所者  
村上天皇後胤公家中院之一家幕紋割菱  
梧桐也先祖北畠大納言入道一品源親房  
公奉後醍醐天皇而足利家尊氏卿謀叛之



項立文武之道有忠節故親房公在吉野宮  
司政務蒙准后宣旨撰職原打定百官式目  
也同嫡子真州國司北畠中納言鎮守府將  
軍顯家卿建武三年丙子春正月從東國攻  
上追下尊氏卿於西海又翌年延元二年丁  
丑春正月鎮守府將軍顯家卿舍弟春日少  
將顯信朝臣共重從真州攻上遂忠戰顯家  
卿於安部野討死也舍弟顯信卿亦為真州

新國司後上洛而屬征西將軍宮於鎮西討  
死也三男北畠大納言顯能卿為伊勢國司  
於伊賀伊勢之間數年挑合戰雲出川南管  
領居住於一志郡多藝御所正平十七年壬  
辰南帝後村上院上洛之時顯能卿兼大將  
軍率伊賀伊勢軍兵入道共入洛司  
朝政然而明德三年壬申秋吉野帝斷絕之  
後其子息北畠大納言顯泰卿奉後小松院



賜安堵之所領而子孫繁昌也其領知者先  
於南伊勢一志飯高野多氣渡會五郡其外  
大和國宇陀郡也凡侍九千人內馬上千五  
百騎小人六千人合壹萬五千之大將也皇  
家衰微之後者公家之大名此國司一人也  
然而稱光院御宇應永廿二年乙未伊勢國  
司北畠大納言滿雅御對足利家義持公有  
謀叛企將軍命近江六角伊賀仁木家大和

筒井越聲市久世滿西當國長野雲林院關  
神部峯千草以下之軍勢攻之國司作要害  
於南伊勢之諸所防之傳聞此時阿坂山上  
立城防敵公方勢不得攻落之唯謀高山無  
水而四方斷水渡送日數攻之城既水渴時  
城中迴計立馬於櫓前以柄杓汲白米洗馬  
欺之攻衆思有水退陣云々而後將軍與國  
司和睦而無事也故本領無恙其後自然一



家繁榮先北畠一家者木造御所也号油小路是顯能御之次男正三位顯俊御奉後小松院居住於一志郡木造為國司之與力其領知有一志郡中允侍六百人内馬上百騎小人四百人合一千之大將也其外於南伊勢國司之領分北畠一族三大將者多氣郡田丸御所其一人也飯高郡大河内御所其二也同郡坂内御所其三也各為國司之幕

下於諸郡中有與力被官也

南禪寺舊記載所立仙和尚南禪金剛顯應誌云曆應五年歲在壬午正月十六夜本寺大雲菴災烟焰既熾衆乃惶惑初觀之足膝為之就屈而莫能起者由是是雖各隨身之其一巾一履竟莫知何以指置但如蜂然耳先是一武官山口氏素以勇略數取國勲近復志於道故約在晨朝必至旁犬后以他夏







旨吉野執行申之。又西國大友田以下大名。七八人將軍分不可有殊事之旨申之。又三角城雲州軍兵數百騎越來之間師恭得其利云々誠珍重事也。

後愚昧記云應安二年四月廿日申甲日吉神

真入洛中武士等如去年八月無出河原之

儀只侍所土岐左馬助也大膳大勢數萬騎

陣法成寺角社邊赤松勢在三條河原邊教

勢也。其外勢不出執事以下大名等。在將軍

亭云々

又云應安六年十二月七日今日故大樹前

納言義七々年正月佛事也於仁和寺等持

院大樹禪侶行佛事將軍行向其場諸大名

等扈從云々

又云永和三年八月八日今夜又可有騷亂

之由風聞云々人々推量分者依越中合戰



武藏守与越中守護故大夫入道子向背之儀也依  
之而方大名等可見繼之聞可及天下珍事  
云々其間雖有種々卷說不遑記之  
又云永和五年二月廿日今夜世上騷動然  
而無為明了分明不知何事卷說云執事頼  
之朝臣也諸大名等可退治彼朝臣之結構  
等有之依之如此云々或云如此諸大名等  
厭却之間頼之朝臣欲没落四國而大樹柳

留之云々  
又云永和五年後四月十四日武士等多上  
越江馳上之由路人稱之中大樹兄弟時在  
彼所云々武士等圍繞之聊不入人云々在  
京大名無殘者云々  
又云永和五年後四月廿一日去夜京中物  
恣云々又其外資康資教等可令罪科之由  
大名等上等一同云々



鹿苑院殿御元服記云永和元年三月廿七日石清水八幡宮御社參中諸大名一騎打之次第小侍所山名彈正少獨管領武勇侍所細川右馬助

百三十三明德記云抑十月十五日午刻八叻地振才ヒタヒシクシテ路次往反ノ輩モ步事ヲエス家内安座ノ人々モ肝魂モ消計也中御所様ヲ始進セテ諸大名近習ノ人々

近モ何事ニテカ有ラハス云ハ落居心御吉事ナリトモ難儀ノ合戦出来リナハ誰身ノ大事ト成何ナル不思儀カ有ランスラント罪ヲ慎ミ身ヲ顧テ悔ミ思ハ又人ハナカリケリ  
花宮三代記云應永廿九年壬閏十月一日管領已下諸大名有出仕也  
又云應永廿八年正月一日乙丑諸大名御



所樣御方御所樣御臺一有出仕云々

松田貞秀記云永和元年三月廿七日石清

水八幡宮御社參畧中諸大名一騎打之次第

攝津掃部頭小侍所山名彈正少將但依所勞取直之

後參之管領武州侍所細河右馬助管領後

騎役人一騎打總後也

松田長秀記云永享十二年七月廿五日大

將御拜賀供奉行列次第畧中近習若大名達

又云正長二年三月九日御元服畧中御祝儀

以後於御會所東向法躰眾其外者大名少々

御對面自由余明日可奉之由被仰出次

又云長祿二年七月廿五日任内大臣給畧中

御出時於庭上蹲居夏公家人達八月花門

与四足門間一列南面一騎打大名同庭上

北面官人四足門外左脇西面西衛府侍裏

築地二傍官人二向東面帶刀四足門







一度に版をかき切て之を川極小所跡云

嘉吉記云赤松大膳大夫滿祐一族ノ耻辱  
コレニスキスト諸大名ヲ語ラセ訥訟被  
申ケル罪科道レ難ケレハ御下知ヲ成サ  
レ持貞腹ヲ切ケリ

康富記云應永八年八月廿四日今朝卯終  
刻室町殿奈良御參詣云々御臺同御參云  
々管領已下諸大名等被參云々

又云嘉吉四年正月十日是日室町殿有渡

御於管領畠山左衛門督入道宿所里小路

亭當御代渡御之初度也自鳥丸殿北小路

路御至管領宿所春日里有路次辻固諸

大名被致警固者也云々

又云應永廿四年八月廿四日今朝卯終刻

室町殿奈良御參詣云々御臺同御參云々

管領以下諸大名等被參云々



又云嘉吉二年九月朔日恭外史文亭之時  
令語給云室町殿御元服事廿八日管領出  
仕之時以伊勢守入道自御所被仰下云御  
元服夏可然候様可被計申沙汰云々中退  
出之後廻使於諸大名被尋之處或可為鹿  
苑院殿御例之由被申云々  
又云嘉吉二年十一月十三日庚午是日室  
町殿御弓始也小笠原民部少輔為御師苑

參入云々今日諸大名近習東向衆等被進  
御太刀云々  
又云嘉吉三年五月六日肥前入道語云近  
日高麗人可來朝也先々要脚被懸仰諸大  
名被出之處今時分諸大名諸國役出錢不  
可叶之間高麗人不可被入立京都可被追  
返也其間事管領畠山被存之間諸大名一  
揆了可被返高麗人也可為如何様哉意



見密々談合云々

又云嘉吉三年六月十九日是日高麗人參

于室町殿懸御目者也中凡今度高麗人來

朝事未付兵庫津之以前於管領有評定其

謂室町殿御切稚時分也諸大名國使已下

要脚無沙汰之時節也旁為無益款之間不

可被入日本之由被仰遣之處高麗人申云

非如先々商賣之料為普廣院殿御帛參洛

之由候間就其可被入款之由諸大名等有

評議遂以被入云々

又云文安元年七月十二日己丑今度彗星

御祈禱内外與御供料事如先々自武家被

沙汰進是諸大名面付不課國別可被致沙

汰之由自管領被申沙汰云々

又云文安六年四月十九日乙巳室町殿御

元服之參賀也先諸大名近習上外樣進上



御太刀懸御目云々

又云寶徳元年八月十二日庚申晚并入夜  
地震小番二番衆山下將監入道語云諸大  
名今朝為瑞春院殿御訪被參申室町殿云  
々  
又云享徳三年十一月廿日丁卯昨日管領  
即被出仕申御馬御太刀被進上了仍今日  
世上無為之御礼諸大名公家門跡等被參

賀申局務不忝官被參賀之

又安年中御番帳云諸大名衆御相伴衆勘

解由小路右兵衛督畠山左衛門督

下畧

季瓊日録云永享八年五月一日旧年鹿苑

院殿并勝定院殿御佛事錢諸大名未進分

可督之旨布命

又云長祿二年卯月十四日接嚴會御聽聞

以先例大名様可被參之由被仰出于伊勢



守即往而傳此命也

嵯川親元記云寬正六年七月廿二日丁卯

若君様所誕生所礼考公家門跡右名存公以

下面進相如先妃云々

舟藤親基記云文正元年閏二月廿一日鶯茶齋

事先及所禁別之知色在之重新作出之以治

河國通訪右名被作之

應仁記云大名ノ身ニヲイテ不義不忠ノ

子細アラハ管領ニ仰出サレ諸大名ト評

評定有テ隨其過失被停止出仕者歟

應仁別記云文正二年十二月廿五日義就

上洛有山名金吾カ様ニアリシカトモ細

川右京大夫勝元ハ尾張守ヲ最負ナリ山

名細川聳モ冨モ入サリケリ以外ノ霍執

也尾張守屋形ニハ高櫓ヲアケ外堀ホリ

コハサレケリ角テノ年立カヘリ春ニソ



成ニケル山名金吾オモハレケル様何ッ  
テ角テ有ヘキソトテ一味ノ大名ヲアツ  
メラル

慈仁畧記云今ハ偏小武門の打執時の譽色  
に帰依せし由り今ハ振旦大名於如  
初いんや小名取名ハ順次の辨別を指とい  
ふも不肖れある可なり

又云神武天皇よりあのかゝ政化を公武の友  
つにいそと記如く大。名。権。威。を。あ。う。そ。つ。あ。  
者ともよそはあをたそ風城のうちに東西次  
日ウ川と陣頭をある魚名さけひ代合せて雌  
雄せけつ氏子ことに逆黨あよりあそ國をか  
らに忠世季百五十四代このかたそめ也  
と川つと歎

多聞院日記云文治十六年丙午月廿七日島山庵  
方書懐之事先規りそ中絶無荒始於徳大



名。寺門出之書状勿備在細川武儀畠山云  
家之事も舊老免悟不同也云々

足利季世記云畠山高政ト家内遊佐河内  
守安見美作守ト不快ノ事アリ是ハ高政  
河内半國ノ領地遊佐ハ代々守護代ニテ  
大名ナレハ威勢主ニ益リケリ安見美作  
守ハ中村円賀ト云者ノ子ナリシヲ安見  
養子トシテ是モ近年守護代ヲ持ケレハ

河州和州ニテ所領アマタ持ケレハ兩人

トモニ大身ニテ主ヨリ多勢ナリ按ニ本

隣夜話ニ謂所ノ大名ハ共ニ陪臣ノ大名也

宗吾大双紙云諸大名ハ河成の時ハ万足引を

以其時幕基の取小足宛は酒れぬ百足

取の手に引さくらやうにあーらつゝ大名乃

内流若用もよく怪分の仁十人おて其止れ又

折紙少く立巻かすもいん此度取かハは諸







而祝已下之事公家大名外撰少々河内流河  
部屋流申次番流番流少々河内流申也

河内<sup>名</sup>始記云細川内少一人之無之在外山名内

小坂屋河内成陸中一是也無蹤跡也此分陸小坂

込軍中渡りあり惣列大名の内仁ふと公方撰

一也と相を色上仕り昔をせむ也大名若くは成

被申内、主因者河内中軍ハ常の候也

河内産和日死云河内生皆河内加持云寶院河使ハ

伴勢去庫助河引出抄等亭主勤仕之云河内

極還河以後大名以下名亦た刀一腰金進上云々

家中竹馬記云公方撰一諸家より河内刀馬

進上者河内死河馬を日代少々河内進上河内小坂

大名名千足也在外名六百足也又奉公流なるハ

大概三百足也

書禮袖珍寶云大名と云時の武性分限此又孫

たるを云也大名と云時に武性早々れ其身



文武養育に立身して名限なきを以て  
侍勤負物難記云所敘に者用く諸大名  
人此子小名字を已けし連山の、其人も此敘  
者用あつて、此如事名字を以て身  
以下依以存分の叙し、其作上、此身小名を以て言  
此述比由畠山殿此名字を叙分所敘者用  
何りて侍勤に系勤く例連綿し、在  
之

江漢記云多氏今義詮々二代の將軍に以て  
武家此政道此補佐し子孫に四職の其一に據り  
是系極處と稱して近江國十三郡の中、八郡  
城六角方知りし、六郡を系極方小支配す  
明徳年中、今系極處又下名小成く、出雲  
隠岐飛騨、本國を知行し、其勢惣欲家小  
平三王也り  
系極傳評定引付云、今、度、和州、在陣、く







ヒケル

大田問答云諸大名の元由出く時振舞如河  
之軍諸大名由出く更ハ三職一職中其の海  
扱よりハ淺く由産由事より其れを以て可存分  
別由由海由縁少く一度庭上より一度以上二度  
此由禮をより

勢州也家記云和州宇陀三人元といふハ澤秋  
山芳野也昔吾國月以与力後少く被官と云

是也彼等何元大名なり

其及家傳書云當方城屋形と云事一熟し  
方名れ宿所を屋形中事元弘建武の比天下  
よりつた元形より時濃弱一行者有事ふ少尚  
國小治と云前には家城立くれより定林古殿  
頼物中何一也世治元所入治之時是城屋形  
と号して恒居あるより初定ふく所をま  
かり有事ふと云し



石鼓為真記云天文七年九月十八日六角勢平  
被友石名而下知子不立入是城多攻下以之系  
石名海老佐朽民以五人等一以之致法合其此  
重而此作上の者以。新一者同及少可有為際之  
名日仍事承之也右子の領合と其思食の里内  
之而系也云々

義光物語云難近敏初進上河定誠小潔く修一  
其退く是案と迫し山系勝らも数代武勇

の家とて東國一此大名あり

松隣夜話云上松古參大名藤田見田菰谷  
等ノ人数評定平井ノ不久ヲ鑑テ氏康ニ  
手ヲ入旗下ニ屬ス云々  
未森記云利家卿利長卿御父子先手村井  
又兵衛不破彦三郎其外家老大名小名呂  
等軍ノ評議アリ云々

伊達日記云政宗公二本松監ノ松御弓矢







女小似る人々を愛するは先づ若を好むを  
を愛し物こそ吾等鑿に名別なく吾等悲  
しむ心むらむ人々を愛ししは強ひて機あり  
しむる事なく氷堅くも損なきとも是  
相也是傳小弱大將の女はことくにあらずと心  
願ふは誠主川く如此如操人にも不給とい  
へし志くは名にく二万之義或六万六万乃  
人数をえりても辱く存る若く百人乃因外

なごるか

叔井日記毛利家與丹波家別所就手苦違  
変從兩家遣使者條云今毛利家天下ニ双  
じナキ御大名ニテ元就公大勇ヲ世上ニ  
見セラレ代々ノ御家ニ候上ハ天下ヲ御  
指南アルハキ御家ト一天下カ沙汰スル  
故ニ喻ハハ西國九國ノ者モ大方ハ数年  
御味方ト唱ヘ候



松原ハナハラ自休手録云此節諸大名ノ家々心々

ニ懸集ル内府ハ羽柴三左衛門一、族羽

柴左衛門大夫黒田如水息甲斐守藤堂佐

渡守羽柴右近太夫有馬法印父子金森法

印以下每夜候之大谷刑部少輔ハ内府ハ

於取懸可為味方私宅ニ集軍勢云々

永祿紀云十月二日池田一沖子を大軍を以

之外梅放火をこれ即池田隆素人質をを上

冒御本陣芥川へ被打入西葉懐し思て最早

殆と五畿田より外諸大名小名公候あり紀系

差

天正紀云信鳥送のふたくれ老母息女をそく人質

とこれをお見寄るこれやみそい小

しを思ひ頼道ん人の心さしをたしを

則十二月廿九日小山崎の城より別り地小

於て敏年何り元よりよりまれば姫路より



之。正。三。二。三。日。の。間。訪。玉。れ。た。名。小。名。殿。中。海。々  
なり。車。馬。門。前。市。を。た。り。

難波戰記大御所就御返事大坂城中評定  
條云老兵等申上ケルハ舊冬御合戦ノ砌  
モ古太閤ノ恩顧ノ大名モ関東ノ御猛威  
ニ恐レ味方皈伏スル者ナシ云々

當代記云天正十六年五月此年於聚樂閣  
白秀吉公金賦リアリ内裡一一金千枚其外

銀進上也諸大名へ金五百枚三枚二百枚  
其上銀相添被遣前代未聞ノ儀也夥共無  
云量其琳城ノ門外於廣地ニ秀吉公束帶  
シ給林札ニ腰ヲカケ令居給各モ裝束シ  
謹テ拜領之大。名。小。名。不。殘。如。斯。也。  
又云慶長十三年正月旧冬駿府火災ニ付  
女房衆五人へ諸國大名小名不殘令音信  
皆金銀小袖等也



板坂ト所度長記云慶長四年冬津路伯と  
家康公知人小由あり成後と其思良を得共  
名ふ名。のつさああり一法度少はあく其  
ともあのかい通法也江戸に扱扱人小流竿と  
中目とそ一なり根存薩摩の者なりし一  
のいせ流竿に其流竿のい流伯とい知人うと  
伊集院言于  
て家老大名あり知人うと伊集院のい知人い

中上其使少系あり一其位并持二百鳥小神流其  
名一ハ由分と中流流少系上扱れより  
と折一其作通のい流伯由小流其系を相む  
甲やう十巻物解馬一尺多其家康公治地の外  
一運に出向同道教参屋へ所つ運た其時  
斗由い云

外様大名

太平記云

天龍寺此上ハ武家ノ沙汰上  
供養條



テ當日ノ供養ヲハ執行ト翌日ニ御幸可  
有トテ同八月二十九日將軍亮ニ左兵衛  
督路次ノ行粧ヲ調テ天龍寺へ被參詣ケ  
リ中畧十番ニハ外様ノ大名五百餘騎直垂  
著ニテ相隨云々  
又云足利殿御相摸入道大ニ驚テサレハ  
重テ大勢ヲ指上セテ半ハ京都ヲ警固シ  
宗徒ハ船上ヲ可責ト評定有テ名越尾張

守ヲ大將トシテ外様ノ大名二十人ヲ被  
催  
又云將軍自筑紫將軍ハ一族四十餘人高  
家一黨五十餘人上杉ノ一類三十餘人外  
外様ノ大名百六十兵船七千五百餘艘漕  
雙テ海上ヲソ上ラレケル  
又云節度使左馬頭直義朝臣不斜喜テ聽  
テ鎌倉ヲ打立テ夜ヲ日ニ繼テ被急テリ



相隨ノ人々三ハ吉良左兵衛尉同三河守  
子息三河三郎石堂入道其子中務大輔同  
右馬頭桃井修理亮上杉伊豆守同民部大  
輔已下十八人外様ノ大名ニハ小山判官佐  
々木佐渡判官入道々譽舍弟五郎左衛門  
尉三浦因幡守土岐彈正少弼頼遠舍弟道  
謙字都宮遠江守佐竹左馬頭義敷舍弟常  
陸守義春小田中務大輔武田甲斐守河越

三河守狩野新从高坂七郎松田河村土肥  
土屋坂東ノ八平氏武藏七黨ヲ始トシ其  
勢二十萬七千餘騎云々  
應仁記云此外奉行頭人ト奉公外様ノ大  
名家々ノ殿ツクリ注サントスルニ際限  
ナシ云々

慈照院殿年中行事云正月四日將軍家出  
御于御對面所畧中三職御相伴衆國持衆准



國主外様。衆一人充奉賀之。於是殿上人出  
于元座公家。披露之後。日野三條御礼次  
大外様衆惣番衆上様御被官一兩人奉行  
衆御目見  
日吉社室町殿。参詣記云。御供奉。中外様大  
名。四人。細川右京大夫頼元。畠山右兵衛佐  
基國。京極沼部少輔高詮。六角備中守滿高。  
西佐々木結城勘解由。左衛門尉藤原滿藤。  
非供奉。

御前  
非御供

國大名

太平記云。武藏野。四陣。御所一揆。トテ三萬

餘騎。二引兩。旗ノ下。二將軍ヲ守護シ

奉テ御内ノ長者國大名。閤ニ馬ヲ扣ヘテ

永祿六年。諸役人附云。外様衆大名。在國。

衆。入号國。攝津守中原晴門朝臣。細川六郎



下

北條五代記云秀吉主君の君を忘るゝは是  
左様ふあゝやゆゑとて人へ技藝を  
國不知名を秀吉に敵のりくををれま  
つらんや

法師大名

太平記云山門去程ニ上林房阿闍梨豪

譽元來武家へ心ヲ寄シカハ大塔宮ノ

執事安居院ニ中納言法印澄俊ヲ生捕テ

六波羅ニ是ヲ出テ護正院僧都猷全齊御

門徒中大名ニテ八王子ノ一ノ木戸ヲ

堅タリシカハ角テハ計シトヤ思ケシ同

宿手ノ者引ツレテ六波羅へ降参ス

異本太平記云江州合先江州ノ敵ヲ退治

シテ美濃尾張ノ通路ヲ関クヘシトテ九

月廿七日股屋左京大夫義助ヲ大將トメ



山<sup>の</sup>徒<sup>り</sup>ハ<sup>の</sup>大<sup>の</sup>名<sup>の</sup>廿<sup>五</sup>人<sup>ヲ</sup>向<sup>ラ</sup>ル<sup>ル</sup>  
賀越鬪諍記云<sup>波多野玉泉</sup>爰<sup>ニ</sup>波多野玉  
泉坊ハ三千石知行シ飛鳥井宝光院<sup>ハ</sup>  
千石知行有<sup>レ</sup>凡<sup>日本國一番ノ</sup>法師<sup>大名ト</sup>  
沙汰シケルカ是<sup>ニ</sup>モ猶<sup>不</sup>飽<sup>足</sup>メ玉泉坊  
密<sup>ニ</sup>信長公ヨリ一山惣務<sup>ハ</sup>一行未<sup>印</sup>ヲ  
取<sup>テ</sup>社領神物<sup>ヲ</sup>進<sup>退</sup>シ諸院諸坊<sup>ニ</sup>黄金  
ヲ懸<sup>テ</sup>信長公方<sup>ヘ</sup>遣<sup>ス</sup>由<sup>テ</sup>取<sup>ル</sup>ク

ル云々十五下三十三日四時辰五ノ野山入

武家名目抄稿第廿二冊



此書係明治十五年三月十七日旧稿校正  
小野由久  
同年四月七日再校并書 秩父忠一  
同年四月九日午前四時以旧稿訂正加朱  
書畢 塙忠韶

明治十五年三月十七日旧稿校正 小野由久  
同年四月七日再校并書 秩父忠一  
同年四月九日午前四時以旧稿訂正加朱  
書畢

塙 忠韶

明治十六年二月

校合 鈴木行一







附錄十六卷之目  
附錄十六卷之目  
附錄十六卷之目

附錄十六卷之目

附錄十六卷之目

附錄十六卷之目

附錄十六卷之目

附錄十六卷之目

附錄十六卷之目



